

陰部に歯のある女性の伝承 —サハリンの伝承を中心に—

阪口 諒

エフゲーニー ウジーニン

キーワード : Vagina dentata、サハリン (樺太)、北海道、アイヌ口承文芸、ニヴフ口承文芸

はじめに

樺太アイヌの口承文芸には Oimakus mahnekuh 「陰部に歯のある女性」というモチーフを持つ物語があることが知られている。この伝承は Vagina dentata 「歯のある膣」と呼ばれ、東南アジア、環太平洋地域全体にも分布している。本州においても若干の採録例があるようである。この伝承は非常に早い時期の樺太アイヌの言語・文化に関する記録である『アイヌ語ロシア語辞典』にも掲載されているが、詳しい内容は知られていない。これまでも Oimakus mahnekuh の伝承について触れたものはあったが¹、サハリン (樺太) や北海道で採録された資料がそれぞれどのくらいあり、どのような類似点・差異があるのか明らかにしたものは見当たらない。そこで、本稿では樺太アイヌが伝承していた Oimakus mahnekuh を中心に、北海道アイヌの伝承、それと合わせて樺太アイヌと密接な関わりがあるニヴフの伝承も可能なかぎり収集し、日本語訳のないものは翻訳をおこない若干の考察を行った。なお、本稿を作成するに当たって、ロシア語資料の収集、翻訳は主にウジーニンが担当し、英語・ロシア語 (一部) ・アイヌ語資料の収集、翻訳は阪口が行った。

国際話型カタログでの Vagina dentata の扱い

スティス・トンプソン²によるモチーフ索引 (Stith Thompson's Motif Index³) の分類では「F547.1.1 Vagina dentata」という番号とモチーフ名が付されている。ウター (2016[2011]) の国際話型カタログでは「1686A* カワカマスの口 (歯の生えた膣(Vagina dentata))」というモチーフとなっている。これらのカタログではアイヌやニヴフを含め北方ユーラシアの伝承の存在は指摘されていない。

¹ Pilsudski (1912: 90-91)、Ohnuki-Tierney (1969: 151-152) などでも扱われている。本稿とも重なる部分があるものに丹菊 (2012) がある。丹菊 (2012) は「海上異界譚」のサハリン・北海道地域における展開・その成立過程について考察しているが、「海上異界譚」には Vagina dentata の要素が見られるものが多くある。

² Thompson の著書の翻訳『民間説話—理論と展開』や『民間説話—世界の昔話とその分類』でトンプソンとなっているので、日本語表記ではそれを採用した。

³ S. Thompson. Motif-index of folk-literature は以下のサイトを参照した (2018/09/10)。
https://sites.ualberta.ca/~urban/Projects/English/Motif_Index.htm

1. アイヌにおける *Vagina dentata*

アイヌにおいて *Vagina dentata* の伝承は数多く記録されている。確認できたものを以下の表にまとめた(表1)。樺太⑤⑥は *Vagina dentata* のモチーフだとははっきりとはいえないものの、他の伝承と共通する女人島というモチーフがあるため、同じく表1に含めておいた。

表1. *Vagina dentata* に関するアイヌの伝承一覧

整理番号	タイトル	出典	採録日	語り手	地域
樺太①	なし	Доброгворский (1875)	不明	不明	樺太
樺太②	Nr. 6. <i>Ójmakus máxneku ucáškoma.</i>	Piłsudski (1912)	1903	Šiśratoka (花森信吉)	タライカ
樺太③	なし(樺太②が引用されている)	知里 (1973)	不明	不明	シラウラ
樺太④	Oimakus mahnekuh	Ohnuki-Tierney (1969)	1968年2月27日	Husko (藤山ハル)	ライチシカ
樺太⑤	The god who visited a Saghalien village where only women lived.	Etter (1949)			樺太
樺太⑥	U-2 イチャルンばあさん	村崎 (1989)	1988年12月29日	浅井タケ	小田洲
不明	なし	Sternberg (1929)	不明	不明	不明
北海道①	xxxiii.-The Island of Women.	Chamberlain (1888)	1886年7月17日	Penri (平村ペンリウク)	平取
北海道②	歯のある女の話	吉田 (1914)	不明	不明	沙流
北海道③	なし	吉田 (1953)	大正5年3月28日	坂下徳二郎	帯広
北海道④	なし	吉田 (1957)	明治44年8月15日	アイツウレ	ニブタニ (平取)
北海道⑤	なし	吉田 (1957)	明治44年7月23日	サノウクノ (川上サノウクノ)	ペナコリ (平取)
北海道⑥	なし	吉田 (1957)	明治44年8月15日	シトメアチ (木幡留吉)	スケレベ (沙流)
北海道⑦	なし	高橋 (1936)	不明	川村女 (40位) (川村ムイサシマツ)	近文
北海道⑧	なし	知里 (1973)	不明	不明	幌別
北海道⑨	なし	知里 (1973)	不明	不明	美幌
北海道⑩	なし	和田編 1999 (和田 1964)	不明	菊地儀之助	美幌
北海道⑪	女ばかりの島	更科 (1981)	不明	宮田タカラモシ (タカロー) 老	胆振穂別町

語彙のみの記録は除外した。

樺太① ドプロトヴォルスキー 『アイヌ語ロシア語辞典』 1875 年

原文は手に入れにくいと思われるので、以下に原文もあわせて掲載する。

【ロシア語原文】

Первоначально мужчины жили отдѣльно и не имѣли у себя женъ. На одном островѣ, называемомъ Инóну-мóсири или Каму́й-мóсири, жили также отдѣльно женщины, имѣвшія дѣтородныя части съ зубами и потому называвшіяся Оймакусъ-махнеку́. Мужчины обточили у нихъ зубы и вступили съ ними въ половыя сношенія, послѣ чего и начался настоящій порядокъ вещей. А прежде мужчина рисковалъ оставить свой членъ у женщины.

[Добротворский1875: 附録 67]

【現在のロシア語表記版】

Первоначально мужчины жили отдельно и не имели у себя жен. На одном острове, называемом Инону-мосири или Камуй-мосири, жили также отдельно женщины, имевшие детородные части с зубами и потому называвшиеся Оймакусъ-махнеку. Мужчины обточили у них зубы и вступили с ними в половые сношения, после чего и начался настоящий порядок вещей. А прежде мужчина рисковал оставить свой член у женщины.

【日本語訳】

最初は男たちは（女と）別々に住んでいて、妻を持っていなかった。イヌモシリもしくは、カムイモシリという島の一つに、性器に歯がついているから oymakus mahneku という女性たちが（男と）別々に住んでいた。男たちはその歯を研いで鈍くして、女たちと性交に入って、それから、あるべきやり方になった。昔、男は自分の性器を女性の体内に残す危険があった。

この伝承がどこで採録されたかは分からない。管見の限り、イヌモシリという島は他の伝承には記録されていない。『アイヌ語ロシア語辞典』⁴では以下のように説明されている。

「Kamùy-mósiiri, 大昔に óymakus-mahnekù が住んでいた島。（同） inónu-mósiiri.」 [117 頁]

「Inónu-mósiiri. (同) kamùy-mósiiri.」 [89 頁]

「Óymakus. (形) 歯のついた。—mahnekù, 言い伝えでは、歯のついた性器をもつ女性達。」 [219 頁]

⁴ 『アイヌ語ロシア語辞典』は寺田（1995-1997）、寺田・安田（2009-2018）によって辞書部は全て翻訳済みである。本稿でもそれらを参照しているが、アイヌ語表記は現行表記に変更している。

北海道① 平取「xxxiii.—The Island of Women.」(Chamberlain, *Aino Folk-Tales*, 1888)

第3段落の翻訳に当たっては石田(1976[1959])を大いに参考にしたことをお断りしておく。また、「(vice-)chieftainess」の訳語も石田(1976[1959])に従い(副)女王としたが、それには「chieftainess」が本来語られたであろうどのアイヌ語に対応するが分からないという事情もある。

【日本語訳】

「xxxiii.—女人島」

むかし、イワナイ⁵のアイヌの長者が二人の息子を連れて海へアシカ猟に出かけた。長者らはアシカを銚で突き刺したが、アシカは銚が刺さったまま泳いで逃げていった。そのうちに、山から嵐が吹きつけてきた。長者たちは銚に繋がっている縄を切った。その後で、長者たちの舟は流された。しばらくして、長者たちは美しい島に到着した。長者たちがそこに到着すると、美しい衣服をまとった大勢の女性が山から海岸に下りてきた。女性たちは駕籠に美しい女性を一人載せて下りてきた。その後、海岸に来ていた女性たちは皆、山へ帰っていった。駕籠に乗った女性だけが舟に近づいてきて「この土地は女人島で、男は住んでいないのです。今は春なのでこの国には変わったことがあります。あなたたちは秋まで私の家で世話を受けることとなります。そして、冬には私たちの夫となるのです。次の春にあなたたちを故郷に送り出してあげましょう。そこで、私を家まで運んでくれませんか」と言った。

そこで、長者と二人の息子は、駕籠に女王を乗せて山へ運んだ。長者たちはこの島がどこでも荒野らしいのに気付いた。そして、女王は家に入った。そこには蚊帳のような金の網のついた部屋があった。長者と息子たちはその中に置かれた。女王みずから長者たちの面倒を見た。昼間には、大勢の女性が入ってきた。女たちは金色の蚊帳の横に座って男たちを見た。夕方になると女たちは家に帰っていった。そして徐々に秋になっていった。それから、女王は「もう木の葉が落ちる季節が来ました。私の外に二人の副女王がいるので、あなたの二人の息子を副女王のもとに行かせます。あなたは私の夫になるのです」と語った。二人の美しい女性が入ってきて、息子二人の手を引いていったが、女王は長者を自分のものとした。

そういうことで、男たちはそこに住みついた。春が来ると、長者の妻が「この国の女たちは、あなた方の国の女とはちがっているのです。草の芽が出はじめると同時に、われわれの膺には歯が生えてきます。それで夫は私たちといっしょにいることはできません。東風が私たちの夫なのです。東風が吹くとみんなお尻を風の吹く方にむけて、子を妊娠します。男の子が産まれることもあります。けれども、その子たちが成人して女と寝られるころになると、殺されてしまいます。それ

⁵ 日高に岩内川があるので、そのことだろうか。ただ、海岸からは遠く離れているので違う場所かもしれない。

でこの国には女しかいないのです。それで女人島と呼ばれるのです。あなたが悪い神にこの島につれてこられた時は、臆に歯の生えている夏だったので、私はあなたと結婚しなかったのです。そして歯が抜け落ちてから結婚したのです。さて、いま春になったので、また歯が生えだしました。私たちが一緒に寝ることはできません。私は明日、あなたを国にかえしましょう。息子さんに言って、今日ここへ来させて支度をさせてください」と言った。

息子たちがやって来た。女王はまだ家にいた。それから、涙をはらはらと流しながら、女王は「危険ではありますが、今夜は最後の夜です。さあ、夜を共にしましょう!」と言った。それから、長者は肝をつぶして、胸の袋の中に美しい鞆を入れ、この鞆を持ったまま女性と横になった。歯形が鞆の上に残っていた。夜が明けて、長者は息子たちを連れて舟のところに行った。女王は泣いて「私の国からは追い風が吹いているので、帆をまっすぐに立てて進めば、イワナイの家に着くでしょう」と言った。そうして長者たちは舟に乗り込み海へ出た。山からは追い風が吹き、帆に風を受けて進んだ。しばらくすると、土地が、イワナイの近くの山々が見えた。またしばらく進むと、イワナイの海岸に着いた。長者たちの妻は未亡人の頭巾⁶をかぶっていた。長者たちは妻を抱きしめた。そうして女人島の話の人々は注意深く聞き入った。それを聞いた人は皆、長者が女王に使った美しい刀の鞆を目にした。(アイヌ語筆記に基づいて翻訳⁷、1886年7月17日ペンリ語り)

[Chamberlain1888: 37-39]

樺太② タライカ、Nr. 6. *Ójmakus máxneku ucáškoma.* (Piłsudski, *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, 1912)

この物語は樺太東海岸北部タライカのシシラトカ(花森信吉)が1903年1月に語ったものである。『研究資料』の中で唯一タイトルが付されている伝承であり、アイヌの伝承において非常に良く知られた伝承であったことが伺われる。実際、ピウスツキもそのような記述をしている。

この伝説は最もよく知られ広範に語り伝えられているものの一つである。B・H・チェンバレンの『アイノの昔話』(英国フォークロア協会編 ロンドン 1888年)⁸にも紹介されているし、ドロトヴォルスキー博士も『アイヌ語ロシア語辞典』(補遺 67 ページ カザン 1875年)⁹でこの話に触れている。L・シュテルンベルグ博士と私は共にギリヤーク語で語られた同じような話を樺太

⁶ チシコンチのことだろう。【萱野辞典】によれば、「涙の帽子：夫に死なれた女性は耳が見えるまで短く髪を切られる。その髪が伸びるまで頭に被っている頭巾のこと。」(304頁)だと言う。

⁷ Chamberlain (1888: 4)によれば、「Translated literally」とあるものは、伝承者の口から語られたものをアイヌ語で書き取った物語だという。

⁸ 本稿の北海道①である。

⁹ 本稿の樺太①である。

で採録している（『ギリヤーク人の言語と民話についての研究資料』（ペテルスブルグ 1908 年 第 17、18、19 話¹⁰）。しかし、この話はいくつかの点から明らかにアイヌ起源である。北海道である老人が語ってくれたところによると、この話に出てくるような女ばかりが住んでいる島がたしかにあったという。それでも彼女たちは東風に身を晒すことによって身ごもり、子供を産むことができた。そして、男の子は一人残らず殺して、娘だけを育てたという。この奇妙ないい伝えは、医者が *Vaginismus* と呼んでいるもの、あるいは日本語でいう“癩”（子宮のけいれん）、つまり、極東ではかなり一般的で、アイヌ人の間でもまれではない一種のヒステリーに、その説明を見出すことができる。このような女性の亭主は、神経を放い果たしてすぐに死んでしまうのが普通だといわれる。だが、アイヌ人自身は、そういう女性が存在することは認めながらも、ここに語られているように、ヴァギナに歯の生えた女もいるのだと主張する。

〔北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳 1982: 164（原文は Pilsudski1912: 90-91）〕

この物語は 1944 年に知里真志保によって「24. 人肉を炙つて喰ふ」という題でピウスツキの（英訳を）日本語訳している。1982 年には北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会が「神からの授かりものを大切に扱うと金持ちになるという由来話」という題名で詳細な註とともに日本語訳を行っている（『創造の世界』52 号に掲載）。この物語の日本語訳はそれらを参照していただきたい。

北海道② 沙流、吉田巖「アイヌの命名につきて（続）」1914 年

沙流アイヌの老翁某々老媪某々常に語るを聞く曰く蝦夷島より海を隔ててメノコ・コタンと稱する島あり一島悉く女子のみかつて男子棲まず。偶男子の至るあれば歡待いたらざるなし。有名なる殿最上徳内がアイヌ名の古老に語り傳へし實話に徳内メノコ・コタンに入りて怪を探る。女陰に齒あり。秋葉凋落と共に脱つ、かくして年々生ず。試に短刀の鞘を以つてす。鞘疵くを見るに人齒の痕に異らず。女子戦を好む。鎖の端に鎌をつけて徳内を挑む。徳内身を以つて僅かに脱するを得たり。彼の當時の鎌の疵なりとて親しく肩を脱き露はして撫しつアアイヌ某々に語りきと。徳内の外にも彼處に至れるものその怪を見る、また同じ。沙流海岸今に往々シコロの皮波に打揚げらる。アイヌはこれをメノコ・コタンのアンバ（浮）と稱す。この傳説は石狩アイヌ間にもありとか。

〔吉田 1914: 196〕

¹⁰ この第 17 話は荻原（1995: 127-133）、丹菊（2014: 51-55）で日本語訳がなされている。第 17 話はアイヌが主人公となっているが、第 18 話、第 19 話はウイльтаが主人公である。第 18 話はニヅフ③、第 19 話はニヅフ④である。

この物語は南方（1926[1914]: 300-304）でも取り上げられている。最上徳内が女性ばかりの島に行き、陰部に歯のある女性から何とか難を逃れるという特異な話となっている。北海道⑦の証言からも石狩の伝説が同じものかどうかはともかく、Vagina dentata があったことが確認できる。

北海道③ 帯広、「3.坂下徳二郎氏談話」吉田巖「古稀談叢—十勝アイヌ 11 故老の談話記録—」1953 年

メノココタンは果して何処にあるかは、わからないが、伏古アイヌは、東南風（メナシレラ）はメノコ・コタンの女王の夫で、メノコ・コタンから吹いて来るのであると言い伝えた。そこで、メナシレラに向って、前を開け居ると、孕むという説がある。メノコ・コタンの女は男陰を、その陰門の歯で噛み切り、頸飾（レクツウンペ）として糸などに結び、頸の前方につるし居るという。

〔吉田 1953: 87〕

北海道④ 二風谷、吉田巖『愛郷譚叢<古老談話記録>アイヌ古事風土記資料』1957 年

（トクナイ・サマの言伝えは「シトミアチ」のと全く符を合しているから省く（註=53 頁のシトメアチ(木幡留吉)の話のこ一本稿の北海道⑥)）／シケレベ（しころ）の皮でこしらえたアンバが、佐瑠太あたりの海岸に着くそうだが、これがメノコ・コタンのアンバだということだ。（明治 44・8・15、ニプタニ、アイツウレ）

〔吉田 1957: 49〕

北海道⑤ ペナコリ、吉田巖『愛郷譚叢<古老談話記録>アイヌ古事風土記資料』1957 年

アイヌの方の話にメノコ・コタンというものがあるというが、ほんとうにあるだろうか。この佐瑠太の浜におりおりアンバ（網の浮）が、波にうちあげられることがある。それはメノコ・コタンのアンバであるといってある。／メノコ・コタンは海中の島で、男 1 人もおらず全部女のみだ。その女の陰門には歯があるそうで、そこへいった男は、陰茎を喰いきられたといってある。秋になればその歯が落ちるといってある。（明治 44. 7. 23、同（註=サノウクノ））

〔吉田 1957: 50-51〕

北海道⑥ シケレベ、吉田巖『愛郷譚叢<古老談話記録>アイヌ古事風土記資料』1957 年

メノコ・コタンは、どこ、どちらにあるかわからないが、昔、1 人のアイヌのオヤヂが、海をい

ったら1島についた。男としては1人もおらぬ、女ばかりおるので、めずらしそうに大勢の女争って引きつれて行くものだ。／女の陰門には確に歯があるもので、陰茎をかみとられてしまうそう。それで試みにシロガニエムシボを彼のにさし入れたら、同じく噛まれて、たしかに歯のあとが残った。そのイムシボ今に伝わっているはずである。／昔、トクナイというトノが、北海道に来て、あちこちめぐってあるいた。北海道にいた和人が、シャモでもアイヌでも、このトクナイというトノが行ったら殺すがよいと言いふらした。そこで白老に行った時、白老オツテナの、ショクンヌレがトクナイにもしこのことを告げたら、ごほうびでもあろうと思って、トクナイの寝ていた部屋に、こっそりいって静かに戸を引いたところが、トクナイははね起きて、ショクンヌレの手首を握った。お前何に來たと聞いたら、ショクンヌレ、実はトノを殺すがよいと言いふれがあつてからトノがもし知らないでいては大変だ、こっそりきかせに來たのだと告げた。トクナイ大そう賞めた上うよう、お前からきかずとも、自分はとうに聞いて知っていた。そらこの通りといて肌を脱いで見せられたらなるほど下にリテンカニ・ハヨクペ（くさりかたびら）を着てあつた。かのショクンヌレも最初は、裸にして改められたりが、刃も何も持っておらんであつたから、疑いは解けたのであつた。／トクナイは序に、体の疵を見せていうには、これはメノコ・コタンで自分がたたかつた時、メノコらが、イヨッペ（鎌）にくさりをつけて投げて戦っていたが、それに傷つけられたものだと親しく疵をさすっていったということである。（明治44・8・15、スケレベ、シトメアチ「木幡留吉」）

〔吉田1957:53〕

吉田巖「アイヌの命名につきて（続）」（北海道②）は吉田巖（1957）に掲載されている話（北海道④～⑥）を元に作られたものかもしれない。

不明（樺太？）Sternberg, *The Ainu problem*, 1929

【日本語訳】

民間伝承的な主題の中には、我々の問題にとって重要なものがあるが、それはオセアニアの（類似した）伝承と一致するものがあるというものである。それは、嵐によって女性だけが住む島に流されたアイヌの物語である。その島の女性たちは男性を魅了し、陰に生えた歯でもって同衾したときに殺した。狡猾な（機転の利く）男がどうにか女性から危険を取り除き、そのおかげで、命の危険があつたにもかかわらず、数名のアイヌが生き残ることができた。この女性たちは風によって妊娠するとも言われている。

私が書きとめたバージョンでは、このエピソードは次のように語られている。「女性たちは前をまくり、陰部に水を振りかけ、風に向かって揺り動かす」

〔Sternberg1929:789〕

北海道⑦ 近文、高橋盛孝「ギリヤク族の民譚」1936年

シュ氏の書（註—シュテルンベルグ(Штернберг)1908のこと）に「與仁に齒のある女の話」のある事は、既に『東洋學叢編』の拙稿¹¹—九四頁中に述べた。此話を近文アイヌ川村女¹²（四十位）に話して類話を求めると、「風の國の女等には與仁に齒がある。雁皮で作った刀の鞘を持って行った人のみ助かる風の圖へ行くにはいつも下げて行け」と云ふ短いウツアシクマを語って呉れた。

○「關下とメノコ」『えぞおばけ列伝』1961年（『アイヌ民譚集』、『知里真志保著作集2』に再録）

以下の話は、いくつかの伝承をもとに書かれており、どの地域の伝承ということができない。また、知里のほかの著作とかぶるものも多いため、表1の伝承一覧には入れていない。

参考話

オホーツク海岸から、はるか東方の洋上に、メナシパ（東風のかみて）という島があつて、そこにはいわゆる「オイマクシ・メノコ」ばかり住んでいる。

この島の女たちは、東の風が吹くと、「メナシ・ホク・コル」（東の風を夫にする）と言って、いそいで浜へ出て前をまくる。すると、ふしぎに妊娠するという。

だから、この地方のアイヌ語では、「メナシ・ホク・コル」ということばを、「父なし子を生む」という意味にも使うのである。

「東風吹かばにおいおこせよ梅の花,あるじなしとて春を忘るな」という古歌は、これを詠んだのだという説もあるが、真偽は保証の限りでない。

×

×

また、この島（註=オホーツク海岸の東方にあるメナシパという島）のカッカ¹³（註=女性器）に生える齒は、鹿の角とひとつで、春になれば生え、秋になれば抜け落ちるので、この島へ流れついた人々は秋から春にかけては安全だが、春になると危い。

そこで、どういうことでこの島へ流れていかぬものでもないからとて、オホーツク海岸のアイヌたちは、沖漁に出るときはかならず鹿の角で小刀の鞘をつくって腰にぶらさげる。その骨の鞘を使えばカッカの齒がぐだけ、何回か使ってくださいくださいしていると、しまいに齒が生えなくな

¹¹ 高橋（1934）のこと。

¹² 高橋（1952: 9）で「川村ムイサシマツト」であると分かる。ただし、この物語は高橋（1952）には掲載されていない。高橋（1952）には石濱純太郎氏に預けてあり戦災を免れたものだけが掲載されているので、この「ウツアシクマ」は戦災で焼失した原稿の中に含まれていた可能性がある。

¹³ 【人間篇】では美幌以外の採録例はない。ほかでは樺太【【久保寺辞典】116】、伏古【【吉田語彙】66】、宗谷【【方言辞典】15】、釧路【【釧路語彙】33】の記録がある。

ってしまい、それから後は安全に夫婦生活を送ることができるようになるという。

[知里 1981:219-220; 知里 1973b: 400]

後半部に掲載された伝承は、話の舞台がオホーツク海であること、樺太の伝承にあるような「砥石」を使うのではなく「骨の鞘」を使っていることから、本稿で後に紹介する美幌の伝承である可能性がある。

北海道⑧ 幌別、知里真志保『分類アイヌ語辞典 人間篇』1954年

(25) 陰部に歯が生えている女 *onimakus-menoko* [o-ní-ma-kuš-me-no-ko オにマクシメノコ]
[o (陰部) +nimak (歯) +us (生えている) +menoko (女)] 《ホロベツ》参考。——はるか東
方洋上に一つの島がありそこに *Menas-pa* [東風の・かみて] とゆう *kotan* (部落) があって、そ
この女たちわ *onimakus menoko-utar* [陰部に歯の生えている女たち] で、それと *ukor* (交合)
すると男わ死ぬ。するとその死んだ男の *chi* (陰茎) を、*uko-ehunara* (奪いあい) して、それに
紐をつけて首から下げて飾り玉にする。この島の女たちわ東の風が吹けば急いでその方に向って
陰部を露出する。すると子をはらむ。それで、今でも「父無子を生んだ」とゆうことを “*menas-
hoku-kor*” [メナシ・ホク・コル] [東風の・夫を・もつ] と云うのである。

[知里 1975[1954]: 59-60]

北海道⑧は幌別の語彙の解説であるので、幌別の伝承かと思われる。この伝承では砥石や刀の鞘を使
って歯を砕くと言うモチーフは見られない。死んだ男のものに紐をつけて首から下げて飾り玉にする
という描写は十勝の坂下徳二郎氏の談話にも見られる。

樺太③ 知里真志保『分類アイヌ語辞典 人間篇』1954年

(26) 同前 *o-imakus-maxnekux* [o-i-ma-kuš-max-ne-kux オいまクシマハネクフ] [o (陰部)
+imak (歯) +us (ついている) +maxnekux (女)] 《シラウラ》
参考。——カラフトにも歯の生えている陰部をもつ女の話があり、多くの男がそのために命を落
すのであるが、或る機転の利く男があつて、あらかじめ細長い粗砥を用意しておいてこの女と同
衾し、まさに *o-wen* (射精) せんとする瞬間においてそれとすりかえると、そこに生えていた歯が
ぱりと砕け落ちてしまったとゆうのである《知里真志保、樺太アイヌの説話〔樺太庁博物館彙報、
三の一〕 pp.113～114》。

[知里 1975[1954]: 60]

なお、この項目にある物語はピウスツキ『研究資料』第6話（樺太②）からの引用である。oimakus maxnekux という語彙が採録されていることからシラウラに Oimakus mahnekuh の伝承があった可能性は高いが、参考として挙げられている話は樺太東海岸北部タライカのシシラトカが語ったものであり、シラウラの伝承ではない。

そして、参考文献として挙げられている「樺太アイヌの説話」（知里 1973a では「樺太アイヌの説話（一）」というタイトル）中の「人肉を炙つて食ふ」では多少意味の取りがたい箇所がいくつか存在する。例えば、「すると第三の男がまた煩惱を起した。彼は袋から粗砥を取出して女に近づき、まさにエヤクリーレンせんとする際にそれをヴァギーナにアインフューレンしたところが、そこに生えていたツェーネがバリバリと砕け落ちてしまった。」〔知里 1973: 311-312〕とあるが、カタカナ語が多用されており、何を意味しているのか分かりづらくなっている。佐藤＝ロスベアグ（2011）によれば、それぞれ、エヤクリーレン、ヴァギーナ、アインフューレン、ツェーネはそれぞれ、ejakulieren「射精する」（erklären「説明する、愛を告白する(古語)」)¹⁴、Vagina、einführen、Zähne「歯（複数）」というドイツ語であるという〔佐藤＝ロスベアグ 2011: 208-209〕。ここで、カタカナ語を用いることによる効果に関しては佐藤＝ロスベアグ（2011）を参照されたい。佐藤＝ロスベアグ・ナナ（2011）は「真志保の挿入した、物語の意味を混線させるカタカナ語は、アイヌの口承に語られる世界が、第二次世界大戦下の検閲によって消し去られてしまわないための苦肉の策であったかもしれない。しかし、歯＝Zähne をカタカナのドイツ語に変換しなければならなかった理由は猥雑な語や検閲では説明が付かない」〔佐藤＝ロスベアグ・ナナ 2011: 211-212〕としており、筆者もある程度これに同意する。ただし他の物語のタイトルを見るかぎりでは、先ほどのようなものを効果的に用いているにせよ、検閲の影響は大きかったと思われる。『アイヌの民話と唄』（1960年出版）の第15話のタイトルは「交合の季節」だが、同じ物語は『アイヌ民俗研究資料第一（アチックミュージアム彙報第十七）』（1936年）にすでに掲載されており、その第13話がこれに当たる。そのタイトルは「Coitusの季節」となっているが、「性交」を意味する Coitus という英語（ラテン語由来）の医学用語に置き換えられており、これも「猥雑」ということで言い換えられたものだろう。

北海道⑨ 美幌、知里真志保『分類アイヌ語辞典 人間篇』索引

oimakuspe [o（陰部）、imak（歯）、us（生えている）、-pe（者）]《ピホロ》そおゆう女ばかり住んでいる島がある。その女わ rera oku kor（風の夫をもつ）と云って風が吹くと浜え出て前を

¹⁴ 佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏は『研究資料』のアイヌ語原文とその英訳を基にエヤクリーレンを ejakulieren だと推定しているが、知里（1944[1973: 311]）「まさにエヤクリーレンせんとする際に」にあたる部分は『人間篇』では「まさに o-wen（射精）せんとする瞬間に」なのでやはり ejakulieren でなくてはならない。

まくっている。その陰部の歯は春になれば生え、秋になればぬけ落ちる。従って秋から春にかけて、この島へ流れついた人々も安全であるが、春になると危い。その島へどおゆうことで流れて行かぬものでもないから、沖漁に出る人々皆鹿の骨で小刀の鞘をつくって腰にぶら下げる。その pone-saya (骨の鞘) を使えば歯がくだけ、何回か使って砕いていると、しまいに歯が生えなくなってしま、それから安全な夫婦生活ができるという。

[知里 1975[1954]: 594]

これとほぼ同じものが和田文次郎氏の遺稿にも見られる。なお、和田文次郎氏の遺稿には『人間篇』と類似するものが多いが、引用しているわけではない（どちらかと言うと和田氏の方が詳細な記録である）。以下に引用しておく。

北海道⑩ 美幌、和田完「アイヌ語病名について一和田文治郎遺稿 1」1964年

樺太に広く分布している、'o'imakus という非現実的病名は、'o'imakusmahnekuh (<'o 《陰部》 + 'imak 《歯》 + 'us 《生えている》 + mahnekuh 《女》) にまつわる伝説と関連している。樺太アイヌのこの伝説については、PILSUDSKI 氏が記録しているが、北海道にも同じような伝説があり、ピホロの菊地儀之助氏から大凡次のような口述をえることができた。

「'o'imakuspe ('o + 'imak + us + pe 《もの》) の住む女護ヶ島は menas 《東風》の海上にあり、この女は rerahokukor (<rera 《風》 + hoku 《夫》 + kor 《持つ》) するという。即ち、風の来る方向に尻を露出して妊むというのである。この女と'ociw 《性交》すると陰茎をその歯で噛られて死ぬという。偶々このような女がいたから、昔はその用心に鹿の骨で作った張形を腰に下げているのだ。これを ponesaja 《骨鞘》という。また刀の柄金 tonekane を潰して亀頭に合うものを作って置いて、用に臨んで使えば、'o'imakihi 《陰部の歯》は折れ落ちるといっている。この歯は、秋自然におちて春又生えるものである。」

[和田完 1964: 110-111 (和田編 1999 付録: 28-29)]

○樺太 (語彙のみ掲載)、和田完「アイヌ語病名について一和田文治郎遺稿 2」1965年

「'o'imakus [ホロ、シラ、ウソ] 伝説的婦人病 a mythical gynecopathy.]

[和田完 1965: 59]

[略語表] には「[ウソ] 西海岸鶴城。」「[シラ] 東海岸白浜及び白浦。」という記載はあるが、ホロがどこを指すのかは書かれていない。幌別の事だろうか (【人間篇】では幌別では onimakus)。

女ばかりで、男が一人もいない島があった。

「そんないいところあるなら、ぜひ行ってみたいもんだ」

若い元気のいい者も、頭の禿げたいいかげんのおやじも、皆そう考えた。そうしてこっそり舟漕いで島さ渡った。だが誰が行っても、何人行っても、一人も帰ってくるものがなかった。

「あんまりいくて帰れないんだべか」

とうらやましそうにいう者があった。

「いや殺されてしまうんだということだ」

誰も本当のことがわからなかった。そしてまた、誰かこっそり渡って行くのだが、やはり帰ってこなかった。

いつか気の弱い男が鮫をとりに行つて、霧にまかれて方角を失ない、この島についたことがあったが、きれいな若い女ばかりに追いかけて、青くなって舟を漕いで逃げ帰って来て言った。

「男なんて一人もいなかった。とつてもとつても、おっかないほどきれいな、女ばかりだった」みんな考えた。あんなに島に行つた男は皆どうしたんだべ。とつて食われたんだべか…、そのとき一人の老人が言った。

「俺たち若いとき聞いたことがある。女のあそこに、歯が生えているのがあるということだ。そんなのに当ると、大事なところを皆食いちぎられてしまう。ことによるとあの島の女たちは、そういう人間なのかもしれない」

みんなは「ごくん」と生つばをのみ込んで、顔を見合わせた。

そのとき一人の頭のいい若者だけがにやりと笑って席をたつて行つた。

若者は手ごろの砥石を一つふところに入れると、こっそり舟を出して島に漕いで行つた。美しい女たちが、シカに襲いかかるオオカミのように若者に殺到した。若者は少しも驚かずこっそり砥石を使った。

「ガリッ！」と音がして、女たちのあその歯が皆かけおちて、もう若者のものをもってしても、少しも傷つけられることがなくなった。

それからは、あとからあとから男が渡つてきて、今はどの島がそれだったかわからなくなつてしまった。(胆振穂別町・宮田タカラモシ老¹⁵伝承)

[更科 1981: 21-23]

¹⁵ 更級 (1970: 24, 30) では「宮田タカロ(一)老伝承」となっている。

樺太④ ライチシカ、Oimakus mahnekuh (Ohnuki-Tierney, *Sakhalin Ainu Folklore*, 1969)

大貫氏によるこの物語へのコメントは物語を補足するものなので、以下に日本語訳して紹介する。

樺太西海岸北部恵須取出身のフシコ（註一藤山ハル氏のこと）が1968年2月27日に語ったものである。この物語を語った後で、フシコはこの物語は北海道アイヌのものかもしれないと言い、後にその言葉を取り消し、樺太アイヌの物語であるが、北海道の近くのどこかで行われたものだと語った。それから、その出来事が起こった様子をこう語った：

ある時、長老たちが（アイヌ語で *etaspe*。（知里 1962:165）によると、トド；キタアシカ *Eumetopias jubata* (SCHREBER) だという）捕りに海馬島 *Kaiba-to*（これは礼文島（北海道の北端の西側）の北にある非常に小さな島にたいする日本の名称である。フシコはこの島のアイヌ語の名前を忘れてしまったとのこと。多くのトドがこの島に集まってくる）に向かった。長老たちは海馬島に向かう途次、時化に遭遇して、この話の舞台となっているもう一つの島へと漂着した。そのため、フシコはこの島を北海道の近くにあると考えている。長老のうちの一人が嵐の中で用いた刀が、フシコの時代にも何人かの樺太アイヌに所有されていて、この物語が実際にあったことだと証明している。

細かい部分が欠落していることから、フシコはこの物語の主なテーマを覚えているだけで、レパートリーの内得意なものではなかったようである。

なお、以下の日本語訳で「刀」と訳しているのはアイヌ語の *ikoronis* である。*ikoronis* は *ikoro* 「刀」*-nis* (<nit) 「柄」だと考え、英訳で *sword* となっているが「刀の柄」としておいた。

【アイヌ語からの日本語訳】

昔、私たちの村の樺太のヘンケ「長老」たちが 島へトドを獲りに沖へ出かけて、海に出かけて島へ行った。舟で行ったのだが、波が強かった。そうして、もう風が強く、波も強かったのでヘンケたちは流された。そうして、流されているうちにある島に着いた。上陸して果たして人間の村があった。それだから、ある家に入った。そして女性ばかりだった。そうして本当に、その女の人たち男の人たちをととても気に入った。男たちを取り合った。その男の人たちはその、そこに泊まって本当にその女の人は男と寝たがった。そうして一人の男を三人の女が取り合った。そうして顔が非常に美しい女の人達であった。けれども一緒に寝ると危ない女の人だった。その人を取り合ったオイマクシ「陰部に歯がある(もの)」は女であった。そうして一人のヘンケが刀を隠して持っていった。そうして女の人と寝る時に、(女の人)は男がととても気に入り、男のものをはげしく取り合い、引っ張り合ったと。それでその刀を隠し持っていたヘンケはその持っていた刀の柄を

女のものに沿って自分のものを挿れるようにして、その刀の柄をその女のものに沿って入れた。そして（女のは）その刀の柄を噛んだ。その女のはその刀の柄をはげしく噛んだ。そのため強く引っ張ったあげく、刀の柄を引き抜いた。そのためその刀の柄は、この世界の終わりまでウチャシクマとして伝えられるのです。この島には女の人たちだけで男もいない島であった。男が一人でも遠いところからやって来るのを見ると、はげしく取り合って、一緒に寝たがって、男のものを切って亡くならせる。そうしてその島にいる女というのは、ウチャシクマにあるオイマクシペの女たちだ。そうして東風があると、東風が来て裾をまくと、東風の風に尻をさらすと、そうするごとに子供ができる。そういう島にいる女の人たち、膣に歯があるものもいる。本当のことだと。ウチャシクマにあるんだ。

[Ohnuki-Tierney 1969: 147-152]

2. 女人島

以上、アイヌの *Vagina dentata* の話を見てきたが、これらの話の舞台の多くは女だけの島となっている。そこで、以下に *Vagina dentata* が登場しないものの女だけの島が登場する伝承を紹介する。なお、石田 (1976[1959]: 248) は *Vagina dentata* を女人国伝説とは一応無関係に扱ったもので、それらのうちのあるものが、アイヌやニヅフの例のように、女人国の説話に結びついて語られているとしている [石田 1976[1959]: 248]。実際、アイヌの伝承でも *Vagina dentata* と結びついていない女人島の伝承が見られる。また、*Vagina dentata* の採録例が多い台湾で調査を行った山田 (2016) でも *Vagina dentata* と結びついていない「女人島」の故事がいくつか紹介されており、やはりもともとは別の伝承だった可能性がある。

樺太⑤ The god who visited a Saghalien village where only women lived. (Etter, *Ainu Folklore: Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan*, 1949)

【日本語訳】

「女性だけが住むサハリンの村を訪れた神様」

もう一つのサハリンの村では、何年も前に女性以外は住んでいなかったサハリンのある場所についての話を聞いた。ある日、一人の女性が、自分たちの村に住んでいる男が少なくとも 1 人いれば素晴らしいかしら、と心の中で思った。

そしてそれは実際に起こった。5月の美しく晴れたある朝、一人の若者がその女性に近づいてきた。女性は会いたいと思っていた男性（というもの）に会えてうれしかったが、突然、あまりにも恥ずかしくて話すことができなくなった。

夕方、女性が床についた後、若者が彼女の部屋に来て、一夜を過ごした。それは夢のように思え

たが、本当に起こったことなのだった。翌朝早く、その男は何も言い残すことなく出ていった。

彼女はその夜には気づいていなかったが、後になって自分の寝室で寝た若者は、その前の日に見た若者ではなく、若者の姿に化けたキツネ神であることを知った。

二日目には、正真正銘のアイヌの若者が戻ってきたが、彼女はその若者と森の中を散歩したいという抑えがたい衝動にかられた。森の中で二人はある小屋についた。小屋の中からは、キツネの神のものだとはっきりわかる太い低音が聞こえてきた。キツネの神は、その女性に妻となってくれるように懇願し、心から愛していると宣言した。キツネの神は女性に、あなたのお腹の中には子供がいて、自分がその父親なのだと言った。

その女性は、人間の若者よりもキツネの神を愛し、キツネ神と一緒にいった。はじめはアイヌの若者と一緒に森に入ったためにキツネの神はその女性に対して怒っていたが、女性が涙ながらに足にキスをしながら許しを求めたので、ついに彼女を赦した。彼女は非常に喜んでキツネの神の前で踊り、キツネ神をきつく抱きしめた。女性はキツネの神と結婚し、非常に幸福な人生を送った。

[Etter 1949: 83]

樺太⑥「U-2 イチャルンばあさん」村崎恭子『樺太アイヌ語口承資料 1』1989年

浅井タケ語り、1988年12月29日録音

あそこはオカムオザキ¹⁶というところだ。そこは昔、アイヌの女たちばかりいる村だったとき。昔は。それで、道に迷った男たちが、そこに上がってそこに住んで、一人の女と一緒に子供を作ったとき。子供を作って、そうして帰ってしまって、それで、女は一緒に行きたいと言ったのに、一緒に行くのをいやがって、棄てて行って、そのあとまた、そこへ行ったら、子供ができた女は子どもと一緒にいて、その子をその男にやろうとしたが、男は子どもを引き取るのをいやがったとき。いやがったから、その女はこんど子どもを棒でたたいてぶってぶって殺して、男はそれを見て、行ってしまったとき。それから、そのあとは、そこは風が強いところになったとき。女島というところだ。女島。風が強くなってとても恐ろしい。舟もつぶれるんでないかと思って、うちのジジは拝んでいるんだ。拝んで…。

[村崎 1989: 98]

なお、風によって孕むというモチーフは、大林（1973: 353-355）によると、奄美大島、沖永良部島、沖縄に分布しているが、南部の宮古群島や八重山諸島には見られないという。それに対して、北方ユー

¹⁶ アイヌ語原文では「Okamuysaki（オカムイサキ）」となっている。

ロシアから北アメリカにかけては、点々としてこのモチーフの分布が見られ、風による受胎モチーフが濃密に分布しているのは、東アジアからインドネシアにかけての島嶼地域であるという。そして、アイヌの場合には、*Vagina dentata* と結びついているが、日本の女人国伝説の影響があるとしている。

3. ニヴフにおける *Vagina dentata*

サハリンにおいてアイヌと接触していたニヴフにも *Vagina dentata* のモチーフを含む物語が見られる。丹菊（2012）で「海上異界譚」とされる物語群の中にそのモチーフは見られる。以下にそうした物語を日本語に訳し紹介する（残念ながらニヴフ語を読むことはできないのでロシア語から翻訳した）。シュテルンベルグ(Штернберг)（1908）第 17 話はすでに翻訳されているので、本稿では翻訳がなされていない第 18、19 話を翻訳する。あわせてピウスツキ(Пилсудский)（2003）が採録したニヴフの *Vagina dentata* を翻訳する。*Vagina dentata* というモチーフが語られていないものの、それらの類話と考えられる 2 話も翻訳した。ピウスツキ（2003）に収録された物語はシュテルンベルグ（1908）第 17 話（荻原 1995: 127-133; 丹菊 2014: 51-55 に日本語訳）と同じジャンルに属する（ニヴフの口承文芸ジャンルに関しては丹菊(2014: 45)参照。後に出てくるトゥルグンドはトゥルグシュと同じものを指している）。以上の物語はすべてサハリンで採録されたものである。なお、ところどころにニヴフ語の単語が出てくるが、ロシア語の読みから推測したものであり、本来のニヴフ語とは離れている可能性があることを指摘しておく。なお、ニヴフ語の表記に関しては丹菊（2006）が詳しい。

○ ニヴフの伝承

以下の文献に *Vagina dentata* が掲載されており、日本語で読むことができる。

① 「G 白い馴鹿と兄弟」北海道教育庁社会教育部文化課編（1983: 58-60）

樺太敷香町オタスの教育所でウイルタ・ニヴフの子弟の教育に当たっていた川村秀弥氏のノートに掲載されていたものである。日本語によって筆記されている。

②A 「陰に歯をもつ女たち（ニヴフ族のトイルグンド）」荻原（1995: 127-133）

シュテルンベルグ(Штернберг)（1908）第 17 話のロシア語からの翻訳

②B 「陰部に歯がある女性たち（散文説話）」丹菊（2014: 51-55）

シュテルンベルグ(Штернберг)（1908）第 17 話より翻訳したもの。ニヴフ語から訳出したものだと思う。

なお、*Vagina dentata* のモチーフはないが、服部（2000[1956]: 141-147）は以下で紹介する物語と似ている点が多く参考になる。また、サンギ(Санги)（1961）¹⁷に「Приключение двух братьев（二

¹⁷ Санги（1981: 394）と同じ物語だと思う。

人の兄弟の冒険)」という物語があり、*Vagina dentata* のモチーフが直接には語られていない（女主人を愛することでこれまで多くの男が死んでいるとは語られている）が、非常によく似た物語である。本稿のテーマと直接には関わらないと判断したため全訳はおこなっていないが、参考としてあらすじを掲載する。参考話①の後の物語は註を含めて全て日本語訳している。

ニヅフ参考話① *Приключение двух братьев* (Санги, *Нивхские легенды*, 1961)

【あらすじ】

「二人の兄弟の冒険」

ケクルヴォ村の二人の兄弟がアザラシ猟に出かけたが、不意に霧が出てきて難破し長い間さまよった。霧が晴れ、見知らぬ土地に近づいた。そこには、ウニシュク「人喰い」が大勢いることに気付いた。あわてて沖のほうへ船を漕ぎウニシュクから逃れた。今度は見知らぬ土地にある一軒の家を見つける。そこに船を着け、その家に入ると、女主人がいてもてなしてくれる。夜になって、弟の方は女主人に近づくが、女主人が気の毒がり（女主人を愛することでこれまで多くの男が死んでいる）、弟を病気にすることで死から逃れさせた。そしてそこからも離れ、次の土地で老人（タイグンガド「創造主」）に出会う。老人は兄弟を金の箱に入れ、故郷へ返してくれる。兄弟は自分たちの土地に帰ってから、老人にトナカイを送る。故郷で自分の家族と再会し、その後は豊かに暮らした。6年後、兄弟は自分たちの冒険を話した。女と出会ったことは話さなかった。7年目に弟は食事をせず、眠ることも無く、口を開くことも無く歌を歌いながら死んだ。これは人魚が弟を呼んだということである。弟の死後、兄はそのことを物語った。

ニヅフ③ 18 (*Штернберг, Материалов по изучению гилячского языка и фольклора*, 1908) [1]

【日本語訳】

Vagina dentibus armata の女たち

ウイルタ 6 人が海へアザラシ狩りに出かけた。霧が立ったから、長く迷って海を回っていた。夜明けに見入ったら、陸が見えた。長く海辺に向かって進んだ。海辺にはマス（ユカラ）が赤く見えた[2]。その人たちは長く海辺に向かって行った。陸に上がった時、そこに家が立っていた。その家に入ると、中には女ばかりいた。その女たちは食事を作って、皆に馳走した。夜になって寝ついた時、一人のウイルタが起きて、一人の女のところへ潜り込んで、ささやいたり、笑ったりしてから「ああ、ああ、ああ！」と言って、その後は静かになった[3]。もう一人が一人の女のところへ行って、しゃべったり、笑ったりして、そして最後にこの人も死んだ。次の日の朝早く目覚めたら、外から一人のウイルタが入ってきて[4]、「何でここにいるんだ？立ち去れ！」と言った。ウイルタの皆が出て、遠くまで行った。途中で、大きな家が一軒見えて、その家に向かって行った。家

の中へ下がって入ると、そこによぼよぼの爺さん（ウニシュク¹⁸[5]）が1人、彼の婆さんも「人間の子供たち」[6]の3人の娘と一緒に[7]住んでいた。その老人は立って近づくと、1人のウイльтаを殴って殺した、釜のところへ引っ張ってきた。釜に入れたが、爺さんは外へ出て行って、上（山の方へ）に走って行って、山を登る途中、姿が消えてしまった。そして、娘は「あの函の中の刀を取って、扉をこじ開けて、外に出よう！」と言った。ウイльтаたちはその刀を取って、扉をこじ開けて外へ出て、娘たちを連れて行って外へ出た。長いこと歩いた。ある人口の多い村に入ると、その娘[8]は「あっちだよ！私の父の家はあっちだ！」。家に近づいて、中に入った。老人が立ち上がって、「ありがとう！私の娘たちをあつ場所から逃がして、こっちに連れてきてくれて！うちの娘たちを嫁にもらって！」うちの人[9]は「よろこんで！」と言って、老人は「みんな、帰るのは明日にしよう！」。次の朝、起きて、老人は皆を3つの船に乗せて送った。「自分の村に来たら、1つの船に白いトナカイを、次の船に黒いトナカイを、そして最後の船に赤いトナカイを載せて、私のその船を送りなさい！」（と言った）。うちの人たちは自分の村に帰って来て、白いトナカイを1つの船に乗せて、黒いトナカイを1つの船に乗せて、赤いトナカイを1つの船に乗せて、その船を送って、帰って、家に下がって行って、太鼓を作って、海の女[10]から「ケグン¹⁹」を作って[11]、呪術をした。3年後、皆は死んだ。

[Штернберг1908: 166-168]

第18話の原註

- [1] この話は第17話の略した異伝であり、アルコヴォ（Аркы-во）村出身のインドゥン（Индын）²⁰という少年から収録された。ある語学的な特徴だけではなく、筋の詳細でも興味を引く。
- [2] Тен i-воганд—直訳「カラフトマスの干し物」（потанд「干す」）、吊るし棒に吊るされたカラフトマス（*Salmo Proteus*）の開き。鮭（赤魚）の真っ赤な色ゆえに、そのように吊るされた大量の魚が遠くから見える。カラフトマスは鮭類の中で、夏に一番早く現れる魚であり、最後に現れるのはシロザケ（*Laxi, S. lagocephalus*）である。
- [3] һампá тақы「それから全ては静かになった」、直訳「その後はなくなった」。
- [4] 「一人のウイльтаが入った」少し遅く来たが、ウイльтаたちに迫っている危険を知らせるためやってきた密かな庇護者。
- [5] 「ウニシュク」老人。（第1話、註15参照）

¹⁸ 「ウニシュク・ミルク／人喰魔である。だまして人間を連れて行き、自分の餌食とする恐るべきミルク（註一化物）と考えられる。」〔服部2000[1956]: 176〕。クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993: 268)にも「ウニルク」という表記で掲載されている。

¹⁹ クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993:349)に「ケグン」とあるのが同じものだと思われる。同じ頁に本話の語り手のインドゥンが登場する。補助霊に関しては同書の348、350、353、355、356頁に記載がある。

²⁰ 註13参照。

[6] Нiгын-ехлун шанх-ехлун 「人間の少女たち」、「人間の娘たち」、直訳「人間の子供、少女たち」、つまり「娘たちは、外見が人間と違うウニシュク (унирк) ではなく、ウニシュクの虜になっただけの本物の人間だった。だが、そのあとの話によると、少女たちは「海の人」の部族に属していた (22 頁) が、後者は外見で一般的な人間とは何も違いがない。この「人間の少女」、「人間少女」という表現は特徴的である。キツネ娘、クマ、鳥、その他を擬人視していることを表している。参照として、たとえば、シジュウカラニヴフ (人間) (第 16 話、註 16)。ニヴフのその「人間の娘たち」と旧約聖書の「人間の娘たち」(бнос адам)、「人間の息子たち」などの比較は教訓となりうる。

[7] Айвут 「～と一緒に」、直訳「自分のところで養って」。

[8] 「その娘」、つまり「娘の中の一人」。

[9] 「うちの人」ウイльтаたちの一番年上、船の持ち主だと思われる。

[10] Тол-нигвын-шанх 直訳「海の女の人」、連れていかれた娘たちは、海を人の娘だった。

[11] 海的女からケグン (кегн) を作った、つまり、シャーマン祈祷の時、海的女はウイльтаたちにとって庇護者になっていた。ケグン (кегн) 第 3 話、註 13 参照。

ニヴフ④ 19 (Штернберг, *Материалов по изучению гиллячкого языка и фольклора*, 1908) [1]

【日本語訳】

ウイльта 5 人がアザラシ狩りに出発した。霧が出てきたから、道に迷って放浪して、やっと陸に行きあたった[2]。ちょうど村があるところへ接岸して、「ウニシュク²¹」たちが住んでいる家に入った。そいつは先の尖った鉄の棒で彼らの肛門を刺そうとしたから、彼らは外に逃げだして、海辺に下りて船を出した。ウニシュクたちはそのすぐ後に下りて、船尾を打って、手の平を船尾にぴったりつけた。船を引っ張って、陸に引っ張ろうとした。ウイльтаたちは刀を出して、相手の手を切ろうとして、切りおとした。やっと出発して、他の村へ近づいた。そこには女性ばかりが住んでいた。家に入って、一泊した。夜中になると彼らのうちの 1 人は女の 1 人と一緒に寝て、性交して、女にペニスを切られて、死んだ。いまや残りは 4 人になった (1 人は、その女が性交中にペニスを切って殺したから死んだ)。また出発して、歩いて歩いて、ある老人[3] のところへやってきた。その老人の箱の中にはいろいろな生きた魚が置いてあって、その魚を殺して、ウイльтаたちにご馳走した。三晩経ってから、彼らを帰らせて、彼らは船の中に横になって、船をすごい勢いで押し出したから[4]、彼らが前に着いた船着き場までも行ってしまった。2 年間そこに住んで、その人たちは死んでしまった[5]。皆死んでしまった。

(Штернберг1908: 169-170)

²¹ 註 12 参照。

第 19 話の原註

- [1] この略した異伝は、ルイコフスク (Рыковск) 近郊出身のイアニム (Іанім) というニヴフ人からピウスツキが採録・校正した。注目を要するある言語的な特徴があり、そして、海の主の描写の詳しさが特徴的なため興味深い。(註 3)。
- [2] Такр-мігвтох「陸上」、直訳「西の地へ」、つまりウイルタたちは東海岸と島の北の先を迂回してから、オホーツク海岸に着いてしまった。ここではサハリンの東海岸のウイルタについて語られている。
- [3] 老人は海の主、タイルナンド (таилнанд) ²²である。魚に命を授け、家の周りに置いてある箱の中に生きた魚をいつも持っている。それぞれの箱には別の種類が入っている。この魚の鱗や皮を削って、それを海に投げると魚に変わる。海の主は人々の庇護者で、道に迷ったり、難破したりする人を救う。空に住んでいることもあり、そこをスキーで歩いているように描写される (天の川はこのスキーの跡である)。
- [4] 「彼らは横たわって、こうやって彼らを押しだした」、つまり、老人は彼らに何も見えないよう、船の中へうつ伏せになるように言って (第 17 話、註 19、20 参照)、海岸から押し出した。その後彼らはすぐに自分の村の船着き場に着いていた。
- [5] 「2 年暮らして、その人たちは完全に死んでしまった」：海の主は、骨が故郷に埋葬されるよう家に帰らせたが、その後はすぐに皆の魂を奪い取った。溺れた人の魂は、ムルヴォ (мывво) ²³という死者の皆の国に行かず、いつも海の主のところ留まっている。

ニヴフ⑤ Тылгунд Каменный дом-западня. Женщины с vagina dentata.

(Пилсудский, *Фольклор сахалинских нивхов*, 2003)

【日本語訳】

「トゥルグンド 石の畏家。vagina dentata の女たち。[7]」

こちら側からのアムール人が 6 人、一隻の船に乗って沖に出かけた。すごい霧が立って、ひどく暗くなった。そして、どのあたりに向かっていたかほとんどわからなくなった。長いこと進んでいて、二日二晩、アザラシを船いっぱい打った。そして、海辺に着いた。舵取りは老いた人で、船首に乗っているのはその老いた人の息子だった。さて、海辺に着いて、もう夜になっていた。火をつけて、アザラシの肉を焼いて食べた。それから寝た。翌日は昼ごろ起きたが、若い仲間が肉を焼

²² 表記からタイルナンドと推測したが、タイグンガンドの可能性もある。クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993: 264) に「タイグヌェンド」の伝説が載っている。

²³ 服部 (2000[1956]: 181) にある「ムルフ (来世)」と同じものを指しているのだろうか。丹菊 (2014: 65) には「あの世に行ってきた話」が掲載されており、あの世はムルグヴォ (mləyvo) となっている。丹菊 (2005) にも「死者の国へ行った話」がある。

いていた。そして、老人が一人、自分たちが着いたところはどういう国なのか見に行った。そして、自分たちの国ではなくて、違う国に見えた。戻ってきて自分の仲間に「この国は違う国、我々の国じゃない」と言った。そして肉を食べて、下に降りて、その国の海辺沿いに行き、長く長く行った。家が1軒だけ立っている。それで、その家の方へ行って、船を海辺に引っ張り出して行った。老いた人が前に、若者が後に乗って、そのように行って、屋根の下に行くと、玄関に長持が置いてあった。その長持に近づいて、その蓋を開けると、(中には)アルニ鳥[8]の頭ばかり、蓋までもいっぱいになっているのが見えた。2人が一齐に戸を開けて入ると、手前の板寝床の上に長持が1棹置いてあった。その蓋を持ち上げてみたら、裸の老人が1人、その箱の中にいた。横になっていた。

(そこで)座って、瞬きをいっぱいし始めた。それで、皆の一番年上の人を動かして、「(これは)キンシュ²⁴だ!逃げよう!」仲間にそう言った。それで、下へ、海の方へ滑りながら降りた。裸の老人を先頭に、キンシュがたくさんついてきて、皆を追いかけてくる。そのように船まで追いかけてきて、近づくと、一番後ろにいた(人)に追いついて、捕まえた。仲間は自分たちの船に上がって、立ち去った。1人の仲間を止めて、捕まえて、連れていくところが皆に見える。残りは5人だけになった。そこから立ち去って、長いこと進んで、またポツンと1軒の家が立っている(のが見えた)。またそこへ向かって行って、近くまで行ったら、中から人の会話が聞こえてくる。それで、また中へ入って、手前の板寝床の上には誰もいなくて、横の寝床の上に誰もいない。横の板寝床1つの奥の隅に、すごく年を取った一人の老女が座っていた。彼女のそばには背がすごく高い、目のひじょうに大きな人が座っていた。前の隅に、1人の若い女性が座っていて、顔の左側に骨まで至る切り傷があって、(その肉が)一片がなかった。仲間は手前の板寝床に上がって座った。船頭は「ありがたい!やっ仲間の家に来た。ありがたい!」と言った。それでも、相手は黙って座っていて、目の前を眺めながら座っている。ついに立ち上がって、皆に近づいて、その1人に近づいて、もみあげをつかんで、上に引っ張った。そしたら、相手がすぐに立ち上がったので、もみあげを放した。そしたら相手が座った。もう1人に近づいて、この人ももみあげもつかんで、上に引っ張って、この人も同じよう立ち上がったので、体重を測った。一番端っこにいた人をつかて、引っ張って、その(人)がまだまだ立ち上がらない。もっと引っ張っても、まだ立ち上がらない。そしたら、彼の頭のとっぺんを引っ張って、板寝床の下に入れた。とても長い鉄の棒[9]を出して、肛門に突っ込んで、背中を刺したり、身体の前方を焼いたりして、自分の火の上に置いて、それから外へ出て戸の鍵をしめた。戸がきしみだして、そこで(家)の全体は石で出来ていて、外へ出る隙間がないことが分かった。仲間はみんな一齐に泣き出した。

それでこの老女は「可哀そうな人たちよ。この「キンシュ[10]」たちの歯がどんなに激しいかこ

²⁴ クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993: 267、268) には「キンル」として若干説明が載っている。

れから分かるから。上にあがって、棚から古い箱をおろして」と彼らに言った。船頭はこの箱をおろして、その蓋を外して、中を見たら（そこには）このくらいの長い刀が置いてあった。（その刀を）取って、見たら、その先から血が垂れている。そしてこの老女は「この刀を取って、出口を作るため穴を開けなさい」と言った。それで持って行って、穴を掘りはじめた。その後、頭を穴に突っ込んで、肩まで入った。もうしばらく掘って、また頭を入れたら、（もう）肩が入った。それから皆は外に出て、自分の船のところへ滑って降りていった。彼の兄の子供は、みんな降りて、（船）に上がった。船頭は、自分の船を水面に押し出して、船に上がった。振り向いたら、例の老人（1人の身体を焼いたやつ）が皆の先に降りてくる、彼の後ろには「キンシュ」がいっぱいいる。降りてきたら、その老人は水に入って（皆がいるところへ）向かってくる。片手を振り上げて、皆の船を打って、手がびったりとくっついた。それで、船を引っ張って、陸に引っ張っている。それで、舵取りをしていた船頭は、老人の腕をさっと斬って、切り落とした[11]。（老人）の頭はもうこっちから遠くに見えていた。

そこを去って、長いこと進んで、ある村に着いた。この村には餌がいっぱいで、船も漁網も船着き場にいっぱいある。数人の女が板棧橋に座って魚の鱗を取っている。それで仲間は船を陸に引っ張りあげて、離れたところへ置いておいた。それで、家の中に入った。その女たちは服が良くて、耳飾りがたくさん飾ってあって、とてもきれいだった。家に入って、手前の板寝床に座った。片方は、扉のそばの隅に1人の女が座っていた。なんて綺麗なんだろう！他方は、奥の隅にもう1人の女が座っていた。（彼女の）髪は半分白くて、半分黒い。それで船頭は「今日（私たちは）とても豊かな村に来た。飢餓で死にそうだったところで来られた」と言った。それでこの老女は「さっそく料理を作って、お客さんをもてなさない。お客さんがかわいそうだから」と言った。そこでこの綺麗な女が立って、そとに出て、また入ってきて、「ベリー類」一皿、脂っこいアメマスを持ってきた。煮て、（釜から）出して、大きな碗に分けて、皆に出して、もてなした。この「ベリー類」を（魚と）混ぜて、大きな白樺皮の容器に分けて、出して、もてなした。それから、自分の板寝床に近づいて、座った。それから、魚の鱗をとっていた女たちが入ってきた。おい、おい、この女たちは男を欲しがっている。目つきで（それが）わかる。仲間の（1人）を見て笑っている。夜になって、寝て、皆が寝付いた時、彼らの1人がゆっくりと起き上がって、その綺麗な女に近づいて、彼女の頭を手を取って、動かして起こした。それで、この女が（彼を）抱きしめて、自分の寝床に引っ張り込んだ。そこで、船頭が起きて、座って、この女と仲間でささやき合うのが聞こえて、それから仲間で「ああ」という声を聞いて、それから何も聞こえず、声も聞こえない。

しばらく寝て、次の日起きたら、仲間とこの女が同じ寝床に寝ている、寝ていた。仲間はみんな起きて、小便しに出かけた。それから、帰ってくると、仲間がいない。どうした？どこへ行ってしまった？この女たちは起きて、靴を履いて、みんな魚を取りに行った。そこでこの老女は「あ、か

わいそうだ、いとしい方々よ」と言った。「今からあなたと息子2人だけです。2人はどこかに行った時、どうしてこの女たちに触りたくなかったのです？この女の性器には歯があるのです。どうしてもあの女たちが欲しかったら、あっちの海辺に、自分のペニスのあるところ[12]へ降りて、このような小さめの小石を取って、持ってきなさい。今夜は女たちのところへ行って、最初はあの小石を女たちの性器の中でしばらく振り動かします。それから、自分のペニスを彼女たちの後ろで働かせるのです」と彼らに言った。

そしたら、兄の息子は船頭と一緒に下に降りて、石を探して、持ってきた。夜になると、兄の息子はこの美しい女のところに行った。その女は足を広げた。そしたら（彼は）持っていた石を彼女の性器に差し込んだ。そしたらきしむ音がして、（石が）入った。そしたら、石で前後に擦って、ギンギンと鳴った²⁵[13]。また擦った。やっとな音がなくなった。そしたらその石を取り出して、置いておいて、自分のペニスをさした。そしたら、なんて気持ちいいんだ。それから終わったら、自分の寝床に行って寝た。その後、次の日起きたら、あの女たちは、自分の性器の歯を壊してくれたことのお礼に、彼にアイヌの飾り[14]を贈って、5個は皆の死んだ仲間の敬意に贈った。5個の飾りを彼らに贈って、それから皆を見送った。

海に入った人の手に似ている大きな岬に向かって、その岬の先端に向かった。その岬の先端からタイルナンド[15]という主人が姿勢をまっすぐにして、姿を現して、大きくなって座っている。彼の近くまで来たら、（彼は）もっと小さくなった、その後、乗りつけると、人間の背丈をしていた。そこに着いた。陸に上がった時、この辺りで人々が魚を取っている、（そこは）（私たちが持っているのと同じく）いろいろなものがある。この船着き場に船がたくさんあって、そして櫂、竿、舵櫂、柄杓、座部、太い魚干し竿、細い干し竿、魚焼き棒などが山ほどたくさんある。

それで、その物をタイルナンドのところへ持って行って、彼にお祈りをして、一緒に彼の家に向かっていった。家の四方八方で魚が飛び跳ねている。このタイルナンドは自分の片隅に行って、さっと通った大きな魚をつかんで、取り出した。頭を打って殺した。釜の中に置いておいた。肉と色々な料理を皆に出した。

その後、次の日、「では、お前たちが家に帰れるようこうしてやろう。箱に似ている船にお前たちをいれて送る。お前らに魚を送ってやる。この道沿いに送ってやる。さあ、一緒に降りよう」と皆に言った。カラフトマスの皮の袋を左手に持って、シロザケの皮の袋を右手に持って、そのように船まで降りた。カラフトマスの皮の袋を広げて、カラフトマスの鱗を一掴み水に投げた。そしたら魚が立てたはげしいしぶきが上がった。（さかなが）そんな勢いで上がってきた。シロザケの皮の袋をほどいて、一掴みいっぱいを両手で海に投げて、また強いうなりが起こった。（魚が）そんな勢いで上がってきた。それから（魚を）皮の箱に入れた。「さあ、海に入って、家に行くんだ。

²⁵ ロシア語訳では「きしむ」とのみ書かれている。

船を持っている老人は（その船の中に）赤いトナカイを置いてから、舵取をして、こっちに送りなさい。船を持っている若者のお前は、（その船の中に）赤いトナカイを置いてから、舵取をして、こっちに送りなさい」と皆に言った。そう言って、皆を送りだした。皆が家に帰ってきた。

今はトナカイを探している。赤いトナカイを見て、船に乗せた。白いトナカイは見つからなかった。苦勞して見つけて船に乗せた。船を水面に押し出した。そしたら、赤いトナカイが乗っていた船はずっとまっすぐ行っただが、白いトナカイが乗っていた船はまっすぐではなく、曲がって、それから、「仲間の」船について行った。このようにトゥルグンドを語り終わった。

[Пилсудский2003: 15-18]

原註

[7] ニスパイン（Ниспайн）²⁶から 1894 年 2 月 19 日に収録された。このトゥルグンドは «Женщины с vagina dentata» (Штернберг Л.Я. Материалы по изучению гилияцкого языка и фольклора. № 17)²⁷.というトゥルグンドの類話と見なすことが出来る。

[8] アルニ（Арни）：黒色の海鳥（ピウスツキ）。

[9] リュケヴィルシュ（Люкэвырш）²⁸：木造の魚焼き棒。民話では鉄の棒になる（ピウスツキ）

[10] 収録者の資料に「人喰い」と書いてある。

[11] 直訳：「追いついた」

[12] 女性器も男性器も同じ語で示されている

[13] きしむ音を示すため、кезирекр という鉄が石にあたっけきしむ音を示す語が使われている（ピウスツキ）。

[14] куни шаһунд

[15] 海の主

ニヴフ参考話② 20²⁹ (Штернберг, *Материалов по изучению гилияцкого языка и фольклора*, 1908)

この物語はニヴフ③④と同じく、Штернберг（1908）においてニヴフ②の類話として紹介されているものである。主人公はアイヌである。

²⁶ クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993: 170, 171) にニスパインという名前が登場するが、「三代前に死んだ氏族の爺さんの名前」らしい。

²⁷ シュテルンベルグ(Штернберг) (1908) 第 17 話のこと。荻原 (1995: 127-133)、丹菊 (2014: 51-55) で日本語訳を見ることができる。

²⁸ クレイノヴィチ(著)・榎本(訳) (1993: 173) に普通の焼串をルウクヴィルというが、クマの肉を焼く焼串はオチェヴルと言うとある。

²⁹ 以下の参考話の日本語訳は阪口が行った。

【日本語訳】

春に5人のアイヌがアザラシ狩りに出掛けた。4人が船を漕ぎ、1人が舵を取って、そうして進んだ。長いこと進んだ後、霧が出てきた。その人たちは彷徨いはじめた。長いこと動き回った後、海岸に乗り付けると、別の土地だ！そして彼らは歩いた、一軒の家へ到着してなかに入った。それから、その家にはおじいさんが1人、おばあさんが1人の2人で住んでいた。その老人はその彼らを1年養った。それから夏に彼らの船を水に降ろし、彼らを船の底に乗せ、そして上から彼らを覆い、次に船を押し出した。その後、船はひとりだけで動き出した。長いこと進んだ後、船は止まり、そのとき彼らが起き上がってながめると、自分たちの村にまで乗りつけていた。それから彼らは自分の家へ歩いた。しばらく暮らした後、彼らは再び完全に死んだ（再び死んでしまった）。

〔Штернберг1908: 170-171〕

第20話への註釈

この異伝は前に述べたもの³⁰より省略されており、女性と人喰いといったエピソードが脱落し、その一方でウイльтаとアイヌの入れ替わりが見られる。その代わりに、主人公が奇跡的に故郷に戻ってくることの詳細が新たに語られている。

なお、この話はピウスツキ(Пилсудский) (2003: 122)にも掲載されているが、そこに付された註には、シュテルンベルグ(Штернберг) (1908)で収集者ピウスツキの名前なしに発表されている由が書かれている。この物語はピウスツキが採録したものらしい。実際、ピウスツキ(2003)のロシア語訳とシュテルンベルグ(1908)に掲載されているロシア語訳は同じものである。ただし、シュテルンベルグ(1908)にはニヴフ語原文も収録されている。

ニヴフ参考話③ **Почему нельзя зевать и потягиваться, когда отправляешься на охоту** (В. М. Санги. **Легенды и мифы Севера, 1985**)

この物語はニヴフ語からロシア語に訳されたものである。Санги(1985)に掲載の94話のうち38話がサンギ(編)・匹田(訳)(1992)に収録されている。ニヴフ(ニヴヒ)の物語として「О сотворении мира (天地創造)」、「жили старик и старуха (おじいさんとおばあさんがおりました)」の2話が翻訳されているが、「Кульгин (クリギン) (Санги1981:345にも収録)と本話は含まれていない。

女だけが住む島らしき描写や、獵師のうち一人が女性の所で亡くなるなど、といった語りが見られる。ただし、これまでに紹介した類話のようにはっきりと *Vagina dentata* の描写はされていない。またニヴフの海上異界譚のうちニヴフが主人公となっている物語によく見られる「海の支配者による魚の処理の教え」という話群とも違っている。この物語は今後 *Vagina dentata* や海上異界譚を考察す

³⁰ 本稿のニヴフ③④の物語のこと。

る上で重要だと思われるので以下に訳出する。この物語は1980年、サハリン州ノグリキ区ダギ村のイルグイ(Иргун)によって語られたもので、A. I. ゲルツェン記念国立教育大学付属北方民族大学ニヴフ語教授であるL. ガッシロヴァ³¹ (Гашилова) が採録・ロシア語訳したものである。

【日本語訳】

「狩りに出かけるときに、あくびや伸びをしてはいけない理由」

三人の男がアザラシ狩りに出かけた。

天気は晴れていて、海は静かで穏やかだった。海にはアザラシは一頭もいなかった。そのとき、狩人の一人が伸びをしてあくびをした。そのとき、海に濃い霧がおりはじめた。狩人たちは急いで戻ろうとしたが、どの方向へ行けばよいのか分からなかった。昼も夜も漂った。どのくらい流されたのか、三日かそれ以上か分からなかった。それから猟師は見知らぬ土地に近づいた。海岸に沿って船を進めたが、一人も見かけなかった。進んで行くうち、人間が暮らしているのが見えた。猟師たちはその場所に向かった。そこには三人の女性がいた。猟師は女性たちのところで夜を過ごすことにした。猟師たちが朝起きると、(船で大声であくびをした) 仲間の一人が死んでいることに気づいた。猟師たちはその仲間を埋葬して、さらに先に行くことに決めた。船で進んで進んで、また別の家庭が見えた。そこには、一人の老人が暮らしていた。猟師は泊まって一晩を過ごし、老人に自分たちに起こったことをすべて話した。そのとき老人は言った。「その人は罪深いことをした。だからあなた方は迷ってしまい、家にたどり着くことができなかったのです。」

翌朝、老人は猟師たちにこう言った。「急いで船に乗って、船底に横になってください。私があるあなたたちを上から隠して船を押し出します。ただ、あなたたちは、船底が砂に触れるのが聞こえるまでは起きて覗くことさえしなければよいのです。陸に上がったら、白いトナカイを捕まえて、殺してください。次にそれを船底に横たえて隠して、急いで船を海岸から離してください。」

そこで、この猟師たちは船の底に横たわり、老人は猟師たちを隠して海に押し出した。長いこと進んだのか、短い時間だったか、外を見たくなくなったが、見なかった。舷に水がさらさらと流れるのが聞こえている。突然、船が砂にぶつかった音がした。

猟師は船から出て、自分たちの生まれ故郷の海岸にいて、そしてそばに放牧されているトナカイがいるのが見えた。猟師たちは白いトナカイを捕まえて、老人が言った通りにした。船は素早くまっすぐに進んだ。猟師たちは自分たちの野営地に近づいて、親戚に迎えられた。彼らのうちの1人だけはいなかったが。海の主は彼のことに腹を立て、それを殺したのだ。

それゆえ、海で狩りをしに出かけるときには、あくびや伸びをしてはいけないことになっている。これはたいへん罪深いことなのである。

[Санги1985: 293-294]

³¹ 丹菊 (2006: 129) の読みに従った。

4. アイヌとニヴフの物語の差

参考話のように *Vagina dentata* と結びつかないニヴフの海上異界譚もあるが、単に *Vagina dentata* の *Vagina dentata* や人喰いといったモチーフが欠落したものと考えるべきかは見当の余地があるだろう。これは海上異界譚の成立を考える上でも興味深いものと思われる。ニヴフの海上異界譚は複数のエピソードが連なっており、単純にアイヌの伝承と比較することはできないが、*Vagina dentata* への対処、刀というモチーフに関してアイヌとニヴフの伝承の間に大きな違いが見られる。まず、*Vagina dentata* のモチーフが含まれるアイヌの伝承 16 話のうち、北海道③④⑤⑧を除いた 12 話で歯の除去が語られている（⑦は刀の鞘の存在が語られているので歯の除去と言うモチーフがあったものと思われる）。そして石もしくは刀（の鞘）で除去をおこなっている。それに対し、ニヴフの伝承では歯の除去が語られているものはニヴフ②、⑤のみである。ニヴフ⑤はニヴフが主人公であるが、ニヴフ②の主人公はアイヌとなっている。ニヴフの物語において主人公がニヴフもしくはウイльтаのとき、*Vagina dentata* を除去し、危険から逃れると言う描写は 1 例しか見つかっていない。ニヴフ参考話①は *Vagina dentata* とはっきり語られてはいないが、近づいた男が女性から病気にさせられることで危険を回避しているが、主人公がニヴフだから歯を除去するモチーフがないとも考えられる。アイヌと歯を除去するというモチーフの結びつきは強いように思われる。

また、アイヌの伝承の中で特徴的だと思われることは、刀の伝来が語られることである。アイヌの伝承である樺太②(③)④、北海道①②⑥では刀の伝来が述べられ、そうした刀は、歯の除去に使っていないものも含めて全て *Vagina dentata* と関わっている。それに対し、ニヴフの伝承であるニヴフ②③④では刀はウニシュク（人喰い）から逃れるときに使うものであり、かつその行方は語られていない。このことから *Vagina dentata* と歯の除去、刀の伝来といった結びつきはアイヌの伝承の特徴と言えるだろう。

5. 北方ユーラシアにおける *Vagina dentata*

資料の全体を把握できていないが、日本語で読めるものとしては以下のものがある。なお、北方ユーラシア地域ではないが、台湾に関しては金関（1996[1940]）に 24 話が紹介されている。二階堂（1928: 151）には「ツングース始め世界到る所にあり」とあるが、管見のかぎりでは以下の物語しか見出せていない。

ウデへ「陰部に歯が生えている娘」齋藤（2011: 63-65）

ハタラという美しい娘が、村の男たちをひとり残らず殺してしまったが、この娘と結婚したいと思った若者が臆に棒切れをつつこんで歯を全部折って、無事に結婚するというものである。

齋藤（2011: 65）は、ウイльта、ニヴフ、アイヌにこれと同じ話があると指摘している（筆者はウイ

ルタにおけるこのタイプの伝承を探し当てられていない)が、この話にはアイヌやニヴフのものとは違い、海上をさまよひ、見知らぬ土地へ付くというモチーフはない。また、女性ばかりの島というモチーフも語られていない。そして、このウデへの話では娘は臍に生えている歯を折られてふつうの人間になるが、ウイルタの類話ではこの女は人食いの悪霊アムバだった、とある。ウデへを含めたトゥングース系の民族の民話資料を搜索したが、*Vagina dentata* の話を見つけることはできなかった。こうした地域ではこのタイプの物語はあまり一般的ではないのかもしれない。上の伝承を見るかぎり、*Vagina dentata* と「女人国伝説」が複合したサハリン・北海道の伝承とはタイプの異なる伝承である可能性がある³²。

おわりに

本稿では、アイヌ・ニヴフの *Vagina dentata* の資料を収集し、日本語で読めないものは翻訳して掲載した。これまで、このタイプのアイヌの伝承を網羅したものはなかったが、集めて見ると予想以上に多くの伝承が記録されていることが分かった。より詳細な検討は今後の課題であるが、資料を収集し、使いやすい形で提示できたことに意義があると考ええる。ニヴフの伝承に関して造詣は深くないものの、これまで指摘されながらも訳出されていなかったものを日本語に翻訳・紹介することができた。ニヴフの物語はアイヌの伝承と比べてもいくつかのエピソードが連続しており、丹菊 (2012: 38-39) で述べられているように、「陰部に歯がある女性たちの島を訪問する」というアイヌに由来する話群が「海の支配者との遭遇」の話群と接触して「化物、海の支配者、陰部に歯がある女性たちの島々を巡る冒険」という話群に発達したと考えるのが妥当かと思われる。今回、北方ユーラシアの伝承に関してはウデへの物語 1 話しか扱うことができなかった。北方ユーラシアの伝承の調査とアイヌとニヴフの伝承に含まれるモチーフに関する詳細な検討は今後の課題としたい。

謝辞

英語からの翻訳に際しては藤田護氏、安田京巳氏に助言を頂いた。この場を借りてお礼申し上げる。翻訳に誤りがあれば、すべて筆者の責任である。

アイヌ語の訳註に使用した辞書と略称

【萱野辞典】：萱野茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂。

【釧路語彙】：アイヌ語釧路方言語彙編集委員会 (2004) 『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「アイヌ・モ

³² ピウスツキ(Pilsudski) (1912: 90-91) も *Vagina dentata* をアイヌ起源としている。丹菊 (2012: 38-39) は「陰部に歯がある女性たちの島を訪問する」という単一エピソードからなる話群はアイヌに由来する話とし、その話群が北上し、「海の支配者との遭遇」の話群と接触して「化物、海の支配者、陰部に歯がある女性たちの島々を巡る冒険」という話群に発達したと仮定している。

シリ」山本多助作品集』釧路アイヌ語の会。

【久保寺辞典】：北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編（2007）『平成 3 年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿）』北海道教育委員会。

【人間篇】：知里真志保（1975[1954]）『分類アイヌ語辞典 人間篇』平凡社。

【方言辞典】：服部二郎編（1981）『アイヌ語方言辞典』岩波書店。

【吉田語彙】：吉田巖（1989）『北海道あいぬ方言語彙集成』帯広叢書編集委員会。

参考文献

日本語文献

アイヌ語釧路方言語彙編集委員会（2004）『アイヌ語釧路方言辞典語彙 附・「アイヌ・モシリ」山本多助作品集』釧路アイヌ語の会。

石田英一郎（1976[1959]）「女人島の話」『覆刻日本民俗学大系 第 12 卷』平凡社、pp.239-252。

ウター、ハンス＝イェルク（2016[2011]）『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』（加藤耕義訳、小澤俊夫日本語版監修）、小澤昔ばなし研究所。

大林太良（1973）「琉球神話と周囲諸民族神話との比較」日本民族学会編『沖縄の民族学的研究—民俗社会と世界像—』民族学振興会、pp.303-419。

———（1996）「解説」金関丈夫著・大林太良編『新編 木馬と石牛』岩波書店、pp.341-349。

荻原眞子（1995）『東北アジアの神話・伝説』東方書店。

金関丈夫（1996[1940]）「Vagina dentata」金関丈夫著・大林太良編『新編 木馬と石牛』岩波書店、pp.253-301。（原題「Dentes Vaginae 説話に就いて」『台湾医学会雑誌』39-2、1940 年）

萱野茂（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂。

クレイノヴィチ、E・A(著)・榎本哲(訳)（1993）『サハリン・アムール民族誌 ニヴフ族の生活と世界観』法政大学出版局。

齋藤君子（2011）『シベリア神話の旅』三弥井書店。

更級源蔵（1970）『アイヌ民話集（増補改訂版）』北書房。

———（1981）『アイヌ民話集 更科源蔵関係著作集Ⅱ』みやま書房。

サンギ、V(編)、匹田紀子(訳)（1992）『天を見てきたエヴェンク人の話 シベリアの伝説と神話』北海道新聞社。（Санги1985 の抄訳）

高橋盛孝（1934）「ギリヤク族に於ける外來語及び外來文化について」石田幹之助・石濱純太郎編『東洋學叢編』刀江書院。

———（1936）「ギリヤク族の民譚」『昔話研究』2(2)、壬生書院、p.644-651。

———（1952）「近文アイヌの伝承」『關西大學文學論集』2(1)、關西大學文學會、pp.9-48。

- (2005) 「ニヴフの昔話『死者の国へ行った話』」 丹菊逸治編『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(2)—テキストの梗概と解説—』千葉大学大学院社会文化科学研究科.
- (2006) 「ニヴフ語の表記」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.123-142.
- (2012) 「ニヴフ民族口承文芸の『海上異界譚』」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』14、pp.33-41.
- (2014) 「ニヴフ」『水・雪・氷のフォークローア—北の人々の伝承世界』勉誠出版
- 知里真志保 (1960) 『アイヌの民話と唄』.
- (1936) 『アイヌ民俗研究資料第一 (アチックミュージアム彙報第十七)』.
- (1973a) 『知里真志保著作集 1』平凡社.
- (1973b) 『知里真志保著作集 2』平凡社.
- 編訳 (1981) 『アイヌ民譚集』岩波書店.
- 知里真志保 (1975[1954]) 『分類アイヌ語辞典 人間篇』平凡社.
- 寺田吉孝 (1995-1997) 「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(1)~(5)」『北海道学園大学学園論集』84-91号.
- 寺田吉孝・安田節彦 (2009-2018) 「M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(6)~(23)」『北海道学園大学学園論集』142-175号.
- 二階堂招久 (1928) 『初夜権 Jus Primae Noctis の社会学的攻究』南海書院 (第50版)
- 服部四郎編 (1981) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 服部健 (2000[1956]) 「ギリヤーク—民話と習俗」『服部健著作集—ギリヤーク研究論集—』北海道出版企画センター.
- 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳 (1982) 「B・ピウスツキ/樺太アイヌの言語と民話についての研究資料〈7〉神祭りについての由来話・五話」『創造の世界』52号、134-164.
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 (1983) 『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』網走市北方民俗文化保存協会.
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編 (2007) 『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』北海道教育委員会.
- 南方熊楠 (1926[1914]) 「アイヌの珍譚」『南方随筆』岡書院、pp.300-304.
- 山田仁史 (2016) 「台湾原住民族における〈文学モチーフ〉と〈物語の文法〉」『アジア・日本研究センター紀要』(11)、国士舘大学アジア・日本研究センター、pp.31-48.
- 吉田巖 (1914) 「アイヌの命名につきて (続)」『人類学雑誌』Vol. 29、No. 5、pp.188-198.
- (1957) 『帯広社会教育叢書 No.3 愛郷譚叢<アイヌ古事風土記資料>』帯広市教育委員会.

—— (1989) 『北海道あいぬ方言語彙集成』 帯広叢書編集委員会.

和田完 (1964) 「アイヌ語病名について—和田文治郎遺稿 1」日本民族学会編『民族学研究』29 卷 2 号、誠文堂新光社、pp.99-112.

—— (1965) 「アイヌ語病名について—和田文治郎遺稿 2」日本民族学会編『民族学研究』30 卷 1 号、誠文堂新光社、pp.47-67.

——編 (1999) 「[付録] 和田文次郎遺稿『アイヌ語病名について』」『サハリン・アイヌの熊祭』第一書房、pp.1-35.

英語文献

Chamberlain, Basil Hall (1888) *Aino Folk-Tales*. The Folk-Lore Society.

Etter, Carl (1949) *Ainu Folklore: Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan*. Chicago: Wilcox & Follett Co.

Ohnuki-Tierney, Emiko (1969) *Sakhalin Ainu Folklore*, Anthropological Studies2, ed. Goodenough, Ward H, Washington D.C.

Pilsudski, Bronislaw (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.

Sternberg, Leo (1929/1998) The Ainu Problem In: Kirsten Refsing (eds.) *The Ainu Library Collection2 Origin of the Ainu Language The Ainu Indo-European Controversy Volume1*: 755–799, Richmond: Curzon Press Ltd.

Thompson, S (1955-1958) *Motif-index of folk-literature : a classification of narrative elements in folktales, ballads, myths, fables, mediaeval romances, exempla, fabliaux, jest-books, and local legends*. Bloomington : Indiana University Press.

(https://sites.ualberta.ca/~urban/Projects/English/Motif_Index.htm (2018/09/20 最終閲覧))

ロシア語文献

Добротворский, М. М (1875) *Аинско-Русский Словарь*. Казань.

Пилсудский, Бронислав (2003) *Фольклор сахалинских нивхов*, Южно-Сахалинск.

Санги, Владимир (1961) *Нивхские легенды*, Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство.

—— (1981) *У истока : романы, повести, рассказы*, Москва

—— (1985) *Легенды и мифы Севера*, Москва.

Штернберг, Л. Я (1908) *Материалов по изучению гильячского языка и фольклора*. С.-Петербург.

(さかぐち りょう・千葉大学人文公共学府博士前期課程)

(えふげーにー うじーにん・ロシア国立人文大学 PhD, ロシア語教師)

The storis of “Women with teeth in their vagina” in Sakhalin

Ryo SAKAGUCHI and Evgeny UZHININ

Summary:

In Sakhalin Ainu oral literature, we can see legends of *Oimakus mahnekuh*: “women with teeth in their vagina”. This type of tale is classified into “Vagina dentata”. We collected as many tales of “Vagina dentata” from Sakhalin and Hokkaido Ainu as possible. Similar motifs are also found among the Nivkh people who live in Sakhalin. Therefore, we also collected “Vagina dentata” tales of the Nivkh and translated them into Japanese from Russian. The folktales show us that there is a close relationship between Ainu and Nivkh although certain characteristics are different.